

看護研究における アフォーダンスの可能性

(企画：川原由佳里・谷津裕子・吉田みつ子 日本赤十字看護大学)

アフォーダンス(affordance)とは、「生き物の環境にあり、生き物が自身の振舞いを自律的に導くために直接的に利用する特別な水準の情報単位—すなわち、環境の『意味』あるいは『価値』と呼ばれているもの」(本号, p.511)を意味する生態心理学の基底的概念であり、米国の心理学者、ジェームズ・J・ギブソンによって提唱された。

環境における生き物(人間や動物)のさまざまな知覚を「環境が提供する意味や価値」から捉えたこのアフォーダンス理論は、従来の知覚・認識論を根底から覆すものとして、ギブソンの提唱以来いまなお注目を集めており、その影響は心理学・哲学、さらには美術・建築などの芸術分野にまで幅広く及んでいる。

そうしたなか、近年においては医療・看護の領域においてもアフォーダンス理論への期待が高まっている。看護界においては、本焦点を企画した日本赤十字看護大学の川原由佳里氏・谷津裕子氏・吉田みつ子氏がアフォーダンス理論に基づく看護研究に取り組んでおり、また理学療法や作業療法の世界では、すでにアフォーダンス理論を用いた実践がみられるようになってきている。

そこで本焦点では、まずアフォーダンス理論の基本的概念とその意義を解説し、そしてアフォーダンス理論が看護研究にもたらすものは何かを考えた上で、看護における実際の研究例、ならびに理学療法・作業療法それぞれの領域の実践例を提示する。幅広い切り口から、アフォーダンス理論の全体像をつかみ、理解を深められる構成を意図している。

看護研究におけるアフォーダンス理論の可能性を探りつつ、研究のさらなる蓄積と発展の一助になれば幸いである。

『看護研究』編集室